



日本森林学会による 日本の林業遺産を知ろう!

旧青森宮林局庁舎（現青森市森林博物館）

九州森林管理局 鹿児島森林管理署 香月英伸



大正期の庁舎

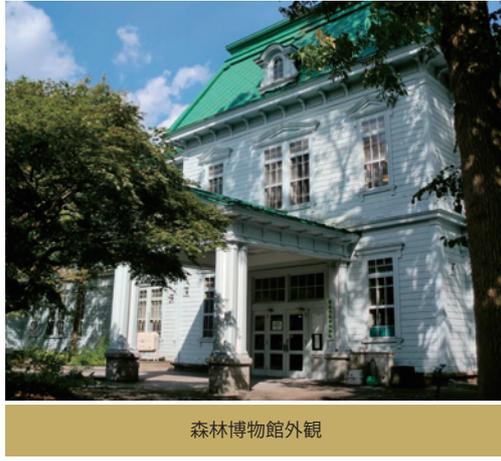
旧青森宮林局庁舎は、明治41年に竣工したルネッサンス様式の木造二階建て建築物で、構造材から造作材、外壁に至るまで青森県産のヒバ材が使用されています。

明治41年から昭和54年まで約70年間、青森大林区署、青森宮林局として使用され、現在は青森市森林博物館として一般公開されています。

特徴として先ず挙げられるのは、建物自体の歴史的価値です。設計者は、現在の東京大学でジョサイア・コンドル（鹿鳴館などを設計）に学んだ文部技師、久留正道氏で、同氏が設計した建築物の多くが、国の重要文化財となっています。

また更なる特徴として、明治末期の国内最大規模の林業拠点であった沖館地区に建築された立地が挙げられます。

青森駅に隣接する海岸部に設置された青森貯木場のある沖館地区は、青森ヒバなどの木材や当時重要なエネルギーであった木炭の流通のための港湾・官船や国鉄駅の専用側線、森林鉄道、官営製材所が整備され、当時最先端の林業拠点でした。



森林博物館外観

国内最大の林業拠点、 沖館地区

国鉄東北本線が青森駅まで開通した明治24年頃の当時、青森ヒバは東京市場でほとんど認識されておらず、青森大林区署は、初期には「青森松」と通称するなど、売り込みに苦労しましたが、明治37年に日露戦争が勃発すると、木材需要が旺盛となり、東京市場で青森ヒバの取り扱いが増大しました。これに伴い明治38年には青森駅の西側に隣接する地に、青森貯木場が整備されました。これは淡水・塩水の2つの水中貯木場、合計3.5haを擁する総面積13.5ha、貯木能力64千m³の、当時国内最大規模の貯木場でした。また貯木場に隣接して、我が国初の官営製材所である青森製材所が、当時東洋一と称される



第1展示室



森林博物館の模型



特別室(旧局長室)

規模で、明治39年に創業されました。津軽半島や下北半島の沿岸部から青森貯木場や官営青森製材所にヒバを輸送する手段として、海上輸送が行われ、貯木場北側の沖館海岸へ官船「みちのく丸」、「浩山丸」が運航されました。更に、青森貯木場を起点として、我が国初の森林鉄道となる津軽森林鉄道の敷設が計画され、明治42年に本線67kmが開通しました。後に支線・分線を含めた総延長は283kmとなり、我が国の森林鉄道の中で最長となりました。こちらは平成29年度の林業遺産に登録されています。

青森大林区署

青森大林区署は、青森県・岩手県・宮城県の3県に位置する広大な国有林

100万haを管理経営する中核的な機関であり、初代及び2代目の庁舎は青森市街地に位置していました。沖館地区が林業拠点として重要な役割を担うにつれ、その監督のため、3代目となる本庁舎が青森貯木場内に建築されました。官営青森製材所と津軽森林鉄道は、青森大林区署が直轄するなど、本庁舎は、沖館地区の中心的な役割を担っていました。

大正13年に青森大林区署は、青森宮林局に改称。戦時中は、門扉や飾柵等の金属製品が供出されましたが、昭和20年7月28日の青森大空襲の際は焼失を免れました。また、昭和52年に公開された映画「八甲田山」では、撮影に使われるなどしましたが、70年以上が経過し、老朽化とともに庁舎として手狭となったことから、昭和54年、青森宮林局は4代目となる鉄筋コンクリート造の新庁舎に移転しました。

その後本庁舎は、青森市に譲渡され、昭和57年に青森市森林博物館として開館しています。1階、2階の6つの展示室のほか、特別室として青森宮林局長室が復元展示され、屋外には、津軽森林鉄道の幹部視察用客車、運材台車が表示されています。

青森にお越しの際は、是非、足をお運びいただければと思います。

写真提供：青森市教育委員会所蔵